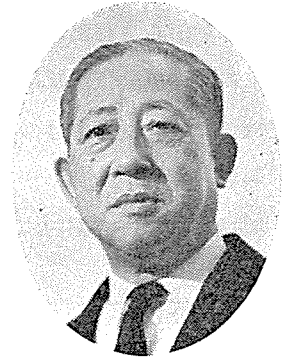


会 長 就 任 に 当 っ て

吉 田 宏 彦*



このたび会長の席をけがすことになりまして、私は光榮と重責を感じる次第であります。まずもって会員諸賢のご支援・ご鞭撻をお願いしたいとおもいます。従来とも会長の選任には土木畑と建築畑との交替制がとられてきましたが、今回はさらに、副会長が自動的に会長にスライドするという慣例を固め、かつ、今後の運営を簡易化しようという気配が作用した故とも申されましよう。私はついに固辞し得なかつたのであります。

現代のプレストレスト コンクリートの発祥は、第一次大戦後の平和時代である 1930 年前後でありましたが、私などもこの卓抜な発想に若き日の感激を燃やしたものであります。その頃開発されたペニシリンが医療界に、ナイロンが繊維界に出現したのと同じような重要さをもって建設界に登場したのがプレストレスト コンクリートであります。

しかし、当時の日本の建設界ではこれに対し半信半疑の感が抱かれていたのであって、「きわ物」「まゆつば物」「流行」という批判の声が識者の中からも聞かれたのであります。それも無理のない話といえるかもしれません。第一にプレストレストという観念はそれまでの建設界には馴染みのうすいものであって、ひどく唐突感をともなつたともいえましよう。それに、鉄筋コンクリート自体すら日本への導入に当って強いためらいがあり、地震国には不適格だとする反対の声が聞かれたということが想起されるのであります。

いまやプレストレスト コンクリートは懐疑の雲を払い去り、構造界・建設界において確乎たる地位を獲得し、さらに今後そのポテンシャルティをいかに開発するかという時期に到達しましたことはご同慶の次第であります。

さりとて手放しの楽観は禁物でありましよう。事実、敬服すべき真面目な卓越した技術であっても、時に利あらずして惜しくも消滅して行くものがなくはないのであります。私はその一例としてツェッペリン飛行船を挙げたいと思います。第一次敗戦後のドイツ国民をZ-船はいかに鼓舞激励したことでしょう。また世界の人々も人類の進歩の一つの象徴としていかにこれに歓呼をおくったことでしょう。しかし超音速マッハ時代に入った今日、もはやツェッペリン飛行船の雄姿も忘却のかなたに消え去ろうとしています。技術もまた時勢に支配される冷厳さをここに見るのであります。

今後の日本におけるPC構造とその建設事業はその発展途上において、直接的には工費および工期をめぐって、鋼構造・鉄筋コンクリート構造・軽金属構造その他との競争に絶えずさらされるでありましよう。さらに、なお発展の余地を残すと目される建築方面において、その競争はいっそう激しさを加えることでしょう。思うに、空間構成を旨とし人間生活・社会生活を包容することを建前とする建築の諸条件は従来にも増して複雑多岐な問題を提起するでしょう。すなわち、安全・保安に対する条件、高層化への要請が課せられるほか、近年ますます拡大する設備付帯工事との調整融合が求められるでしょう。さらには、建築造形に関連する問題も登場することでしょう。たださしあたっては、PCの防火上の検討吟味ならびにPC構造の高さに関する法規的制限の撤廃もしくは緩和が当面の緊急課題であるといえましよう。